放浪

俺はもう右も左も分からない
ぐいぐいと胸が喉元まで押し上げてきて
眼球が下から持ち上げられて鈍く痛く
脳味噌までがスプーンですくい取られ
はてはガリガリと爪でかき取られるようだ

これはもうか細く美しい憂愁ではなく
妖しげに原色で塗りこめられた嘆きでもなく
ましてや寒く凍てついた悲愴でもなく
渦巻くような悲壮をこめた絶望の行進でもなく
ただただグロテスクなやつれ果てた病だ

がくがくとわななく骨も細った脚を
ぐらぐらと地面に突き立て、突き立て
ただ、己の死に‘力’という冠を載せるために歩く
俺から分裂し、そして再び俺の背にのしかかった俺の魂よ
お前の勝利、すなわち俺の死をよく見るがよい
そしてお前はこのだだっ広い荒野の中に
その時、本当にただの独りぼっちを噛みしめるだろう

(1982.5.24)